

異学年合同道徳授業の意義 —地域素材でおこなう命の道徳授業—

上 藺 恒 太 郎（長崎大学教授）

森 永 謙 二（久留米市立下田小学校長）

2009 年 2 月 25 日に久留米市立下田小学校において、1 年・1 年特別支援学級・6 年合同の道徳授業を、地域素材であるカササギを資料としておこなった。6 年生はカササギに関する総合的な学習の時間を合計 15 時間おこない、その成果をもとに、劇を 1 年生の前で演じ、この劇を授業素材として 60 分間の合同道徳授業をおこなった。6 年生は、授業素材を提供するだけでなく、1 年生とペアを組み、1 年生を支援して授業に参加した。

本道徳授業は、1. 命が大切な根拠を多様に支えることをねらいにして進められ、2. 異学年の合同授業である点、3. 地域素材を使った点に特色をもっている。

命の共同体

物語は下田小学校のイチョウの木にあるカササギの巣から始まる¹⁾。

社会性が芽生える時期の小学校 6 年生が、城島町のシンボルであり国の天然記念物に指定されていたカササギについて、総合的な学習の時間を使って、生態だけでなく、命を地域共同体が支えていることについて学習した。カササギは、人がいる地域に住み、耕作によって食べ物を得、水のあるところに住む。人が住み、田が広がり、筑後川が流れる下田小学校の環境は、カササギのいい住み家となっている。カササギを支えているのは、人の共同体であった。

6 年生は、足を使つての、また情報収集による自分たちの努力だけではなく、ゲスト・ティチャーの助けを借り、カササギの眼から見る総合的な学習「地域を見つめろ バード・アイ」によって、地域を命の共同体として認識することができた。命の共同体は、カササギのバード・アイに仮託して見えてくる地域の見え方であった。

命の共同体の学習は、また環境問題への対応につながり、学校全体としての学びにつながる。4 年生が筑後川に看板を立てて川を汚すまいと訴えた努力は、命の共同体の繋がりのなかでは、カササギを守ることにもなっていた。命の共同体の自覚は、学校全体としての共同の学びの結び目でもある。命の共同体として地域を学び直す作業は、6 年生の社会意識の拡大にともなって、公共空間における命へと、社会のセーフティ・ネットや地球環境といった命の公共空間構築に向かうものである。

学びの共同体

6年生の学びの出発点である学校にあるカササギの巣は、1年生にとって教室から日ごろ見えている。命を育む地域空間を鳥瞰することは、6年生だけでなく、学校全体の、すなわち1年生にとってのテーマでもある。カササギの生息は、地域の特性を示し、自分たちの意味を問うている。なぜカササギのヒナは、子どもたちの集まる場所で生まれるのだろうか。

下田小学校は、各学年1学級構成である特色を生かして、異学年のつながりに取り組んできた。また下田小学校が目指す学びの共同体の方向は、異学年協同の学びに行きつく。今回の異学年合同の道徳授業は、学校運営の表れである。異学年合同の学びは、学校運営の成果が現れてきた学年末の時期に、道徳授業として実現することになった。

子どもたちの関係には、学校運営だけではなく、地域の共同関係も現れており、異学年合同は、地域が育てた学びでもある。

子どもたちのピア・サポート関係をつくり出すことは、子どもの安全と安心を支える。子ども同士のセーフティ・ネットが、子ども同士による、すなわちピア関係による支え合いである。イギリスや日本の先進的な学校において、ピア・サポートがいじめの構造に対して有効であることが示されてきた。子どもの関係づくりとしてのピア・サポート活動を、ここでは道徳授業に活かそうとしている。

羽ばたけ1年生

1年生は、地域と学校と6年生とのなかで、すなわち守られた空間において飛躍を期待されている。1年生の年齢段階からすると、地域を命の共同体として考えるには、飛躍がある。しかしヴィゴツキーの共同の学びによる飛躍²⁾（発達の最近接領域）やジーン・レイヴとエティエンヌ・ヴェンガーのいう正統的周辺参加³⁾は、飛躍を含んだ学びに意味があることを示唆している。1年生が、6年生と共同で、飛躍しようとする努力に意味がある。1年生各人の現状の力を超えた飛躍を、共同の学びに期待できるのではないか。

異学年合同の学びは、地域共同体の遊びにおいて子どもが伸びてきた形ではなかったか。異学年合同の学びは、大きくなりたいと1年生が背伸びした遊びの形を、学校教育に生かす試みである。

道徳は、人と人のかかわりにおいて生まれるのだから、道徳授業を異年齢の場ですすめることに合理性がある。道徳教育は、発達段階の均等な輪切りによってよりも、よりすぐれた思考との出会いによって、飛躍を期待できる。

命の理由が課題

下田小学校の子どもたちは、命の大切さを理解している。連想法による連想マップ（図1，2）は、命が大切だと子どもたちが考えているようすを描き出す。

連想マップ(Association Map)

Date: 2008年12月24日

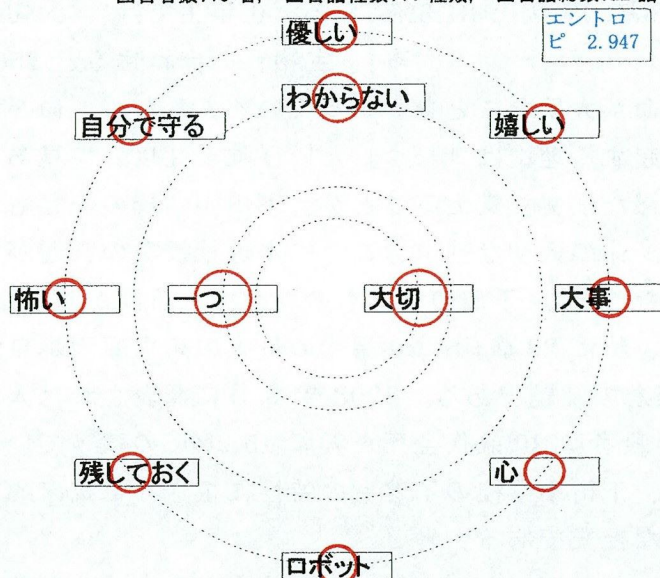
下田小学校1年生

Cue Word: いのち

produced by K.Kamizono

Module Version 4.00, Programmed by T. Fujiki 2005.

回答者数: 16 名, 回答語種数: 11 種類, 回答語総数: 22 語



〈いのち〉が「大切」で「一つ」しかなく「大事」との回答が人数比81.3%を占める。
「わからない」「怖い」の回答語が気になる、いのちの教育の必要を示している解釈すべきか。

図 1

連想マップ(Association Map)

Date: 2008年12月24日

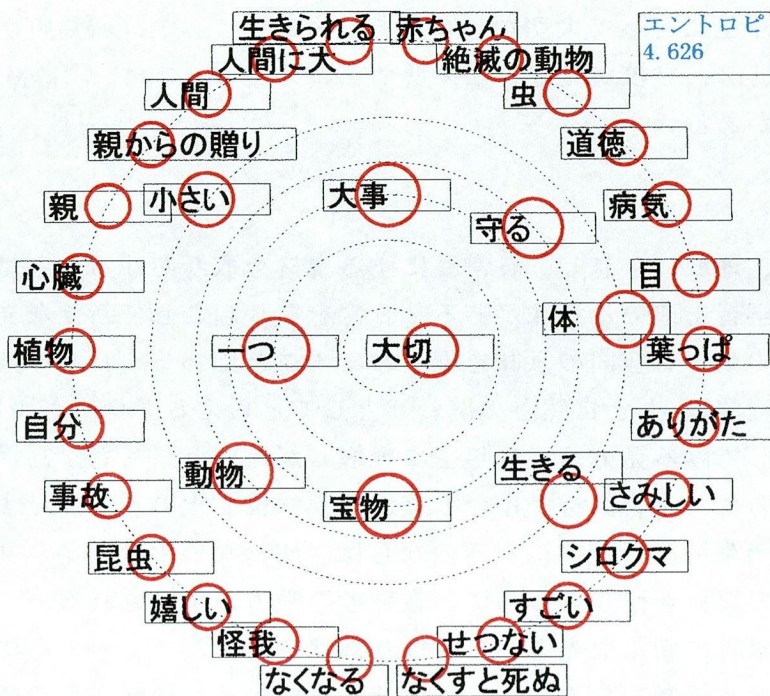
下田小学校6年生

Cue Word: いのち

produced by K.Kamizono

Module Version 4.00, Programmed by T. Fujiki 2005.

回答者数: 16 名, 回答語種数: 35 種類, 回答語総数: 63 語



小学校6年生では、「大切」(人数比68.8%)に集約されるが、「一つ」「大事」「宝物」を加えると156.3%になる。
《感情》語は少なくなっている。

図 2

1年生（図1）、6年生（図2）とも、提示語〈いのち〉から想起する言葉はなによりも「大切」である。1年生では「大切」を人数比43.8%が想起しており、「一つ」「大事」と合わせると、人数比81.3%になる。6年生では、「大切」は人数比68.8%が思い起こしており、「一つ」「大事」「宝物」を合わせると156.3%になる。つまり、子どもは、命が大切なことをわかっている。しかし、命が大切な根拠になると、子どもの想起する理由は「一つ」という唯一性以外に見あたらない。すると命の大切さを多様な根拠で支えることが、下田小学校の子どもたちの生命観を支えることになる。命の大切な理由、ここに本道徳授業の課題がある。

命の大切な理由を心に刻むことは、下田の子どもたちの課題であるばかりではなく、自殺の増加する日本社会の、特に20歳代、30歳代の最大の死亡原因が自殺である日本社会⁴⁾において、緊急の課題である。2008年9月に発表された人口動態統計において、20歳代の自殺者は20歳代全死亡者の45.2%にのぼっている。下田小学校の命の合同授業は、下田小学校の子どもたちの特性に根ざして臨床的であるとともに、日本社会に必要な授業である。

カササギの命は、1年生にとって、なぜ大切なのだろうか。カササギの希少性は、他地域との比較考量情報をもたない1年生にとって根拠にならない。カササギの生態を知って親近感をもつことも、生態調査にまだ踏み込めない1年生には難しい。すると、1年生にとってカササギの命が大切なのは、みんなが大切にしているからであろう。みんなが大切にしている態度を見習うこと、そこに1年生の命が大切だとの意識形成の源がある。言いかえれば、1年生にとって自分が大切なのは、みんなが1年生を大切にすることからだ。

見習うことは1年生にとって大切な学びである。ここに、1. 城島町がシンボルとして取りあげ、2. 学校が見守ったカササギの巣を取りあげ、3. 6年生とともに学ぶ、意義がある。

日常生活の素材

学校に巣を作り、地域に生息し、日常目にする素材を取りあげることが、子どもの日常に接した学習を進める意味がある。日常を掘り起こして新たな光をあてることは、子どもの生きる空間の意味を掘りおこすことである。日常の素材を、生物の生態系や環境問題、人と自然との関わりとしてとらえるグローバルな視点、地域を命の空間としてみる見方は、1年生に理解しがたいとしても、高邁な意識によって光をあてられた学習素材を用いる贅沢は、学校文化の質を高くする。贅沢な学習素材が1年生の生活空間にあるのなら、使わない手はない。文化として意義の高い日常の素材を使うところに、教育者の眼力が生かされる。

日常にある学習素材に新たな光をあてて取りあげるのは、こどもの心に接し、子どもの日常に生きる授業を生み出そうとするからである。地域資料の開発と子ども同士による学びは、素材と仲間がもともと子どもの生活につながっているだけに、生活に結びついた学びを生み出す可能性が大きい。

6年生にとって本道徳授業は、自分たちの学びを学校共同体の全員に向けて表現する活動であり、高学年の存在意義を高からしめる。学びは、知識の獲得だけでなく、知識の再構成による表現によって深まり、身につく。1年生に要点をわかりやすく伝える再構成の努力は、学びを定着させる意義をもっている。学びの成果の表現は、子どもにとって確認であるばかりでなく、楽しさである。劇として学びの成果を体現し、劇⁵⁾が1年生の学びの素材となり、共同で学ぶことは、知識獲得以上に、6年生を表現者として、また表現の反響による反省的な学びとして、飛躍させるであろう。

自己をふりかえる

道徳教育は、自分をふりかえるところに要点がある。生き物の命についての学習は、自分の命を省みることになる。本道徳授業は、自分へのふりかえりの過程を学習に組み込んでいる。カササギの命の大切さを、ひるがえって自分の命の大切さの認識として育てるところに道徳授業の意味がある。カササギの命がなぜ大切なのか、根拠をもって命の大切さを学ぶことは、自分の命の大切さを根拠をもってわかることである。この道徳授業の目的は、カササギではなく、自分の命が大切であることを根拠をもって認識する点にある。

1年生が自分の命を、教職員、地域の人、周りの子どもたちに守られ支えられた自分のあり方として認識するように期待して、この道徳授業は組まれた。学校のイチョウの木のカササギの巣で守られて誕生したひなの姿は、移し替えられて、教室に坐っている1年生の姿である。鳥が巣に坐って育つように、子どもは学校で育つ。本授業は、授業素材や授業展開とともに、舞台も、地域、学校、子どもたちで作りあげられており、みんなが守り支えているとのメッセージを1年生に送っている。巣にいるひなが大切であるように、あなたたちが地域、学校、子どもみんなにとって大切なのです、地域にある学びの公共空間としての学校で、羽ばたいてくださいと。

生命尊重の定義

本授業で扱う生命尊重は、教育法体系においては、教育基本法の第一章教育の目的及び理念の（教育の目標）四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと、に淵源がある。本授業は子ども自らの生命を、自然のなかで命を育むカササギを通して、命のつながりとしての地域環境に位置づけようとするからである。

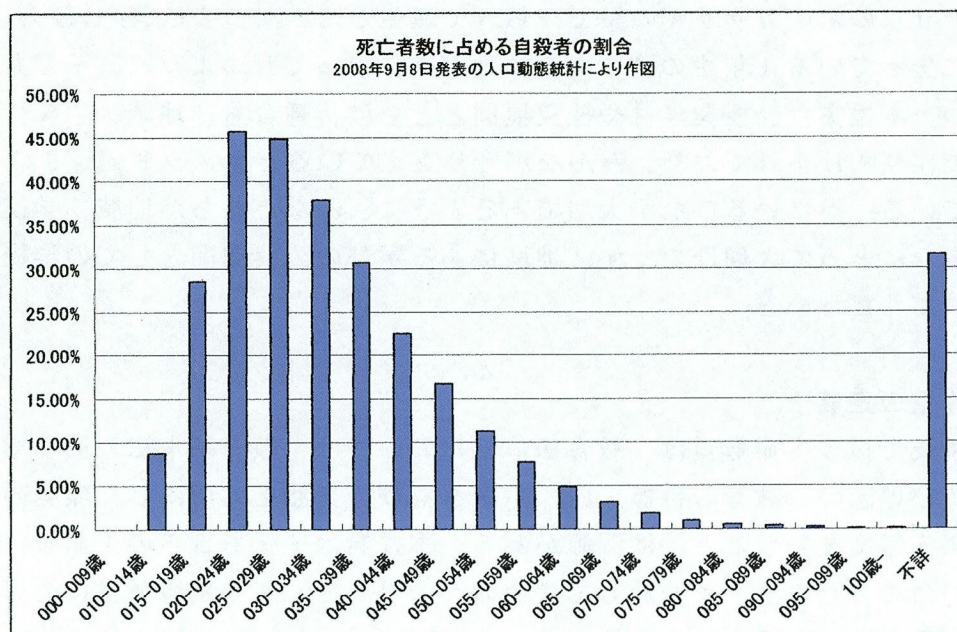
生命尊重を本授業では、小学校1年生と6年生の特性を考慮し、現行学習指導要領にもとづき、また新指導要領を考慮して、以下のように定義する。すなわち、1. 自らの生の喜びを感じながら、2. 誕生の喜びを通して、3. 自然界に存在する生き物の命を大切にし、4. 共同体のかかわりのなかに命があることを知り、5. 自分の命を輝かせて生きていこうとすることである。言い換えれば、命は本

授業では、唯一性、継続性、共同性に根ざした生の喜びとして規定される。加えるならば、命の有限性と多様性は本授業では取りあげない。

自然と地域と人の共同を命のつながりとして認識し、子どもの生き方の基盤にある生の喜びを感じながら、命が大切な理由を深めるところに本授業の主旨がある。

註

- 1) 森永謙二は、学校のカササギの巣を資料に道徳授業をおこないたいと考え、上藺恒太郎がこれを支援した。
- 2) 子どもの目下の水準だけではない点では、ヴィゴツキーと同様であるが、飛躍との表現をしたのは、期待を含むからである。ヴィゴツキー自身は発達の最近接領域について「成熟しつつある機能」との表現をする。ヴィゴツキー、柴田義松訳（2006）、思考と言語 新訳版、新読書社、p.298
- 3) ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーは、ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー、佐伯胖訳（2001）、状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加、産業図書、において「私たちの見解では、多層レベルでの参加が実践共同体の成員性には必然的にともなっている」（p.80）という。
- 4) 厚生労働省の人口動態調査による。2008年9月発表の人口動態統計から各年齢段階の自殺を原因とする死亡者の割合をグラフ化すると次のようになる。



- 5) 6年生の総合的な学習の成果表現であり、1年生との合同道徳授業資料である劇の台本を掲げる。

「かささぎの ひな」

人物	セリフ	動き・表情等
ナレ	①ふゆになったある日、下田のそらを、二わの かささぎが とびまわり、すをつくるばしよを さがしていました。	
か①	ここは、大きな 川に、水が たっぷりあるね。	(下田を上空から見た映像。グーグルアースと航空写真)
か②	川のどても あるし、田んぼも、たがやされて、えさが たくさんありそうですね。	・筑後川、耕地、地域の人
か①	ちいきの人たちが やさしそうだね。	・下田小学校
か①	すを つくるのに ちょうど いい 木があるよ。	・銀杏の木
か②	そうですね。子どもたちが見守って くれそうな ばしよですね。	
ナレ	二わのかささぎは 下田小学校の、いちようの木にとまりました。やがて、二わのかささぎは、木のたかいところに、すをつくりはじめました。	
	ふゆじゅう かかつて 千六百本くらいの 小さな 木のえだを はこんで、つくりあげました。	
ナレ	②はるのはじめに おかあさんかささぎが 五つのたまごをうみました。ちやいろの まだらもようのある 小さい たまごです。	(卵の模型、巣の模型)
ナレ	③二わのかささぎは、ちくく川をこえて ふく はるの あらしのひも、田んぼを めらす 雨の日も、こうたいで たまごを あたためました。	たまごをだいて
か①	かわいい たまごだよね。いっしょうけんめいに あたためようね。	
か②	うまれるのが たのしみです。	
ナレ	④四月、子どもたちが にゅうがくするころ、いちようの木の上で、五わのひなが たまごを わって 出てきました。げんき いっぱいです。	ひなの登場
ひな①	やっと出られた。	
ひな④	きもちいい。	
ひな⑤	はねをのばせるぞ。	
ひな②	まぶしいね。	
ひな③	まわりは たのしそうだね。	

か①	げんきな こどもたちが うまれて うれしいね。	ひなを見て
か②	よかったですね。なん日も なん日も あたためて うまれた こどもたちですから。	
ナレ	⑤おなかをすかせた ひなに ニわのかさぎは 二十三にちのあいだ 一日なんかいも なんかいも えさを はこびました。	
か②	はやく 大きくなってね。	えさを食べさせながら
ひな①	えさが おいしいな。	
ひな②	もっと ほしいよう。	
ひな③	ばく ばく。ばく ばく。	
ひな④	ほくにも ちょうだい。	
か①	もうすこししたら、じぶんで えさを みつけるんだよ。	
ひな⑤	はやく とびたいなあ。	
ナレ	⑥あるとき、ひなを ねらって カラスが おそってきました。かさぎの いちばんの てきは カラスなのです。	カラス登場
カラ①	あんなところに ひながいるよ	
カラ②	おいしそうだな。しめしめ。	
カラ①	いまは 人も いないから ちょうどいいや。	
ナレ	さあ たいへん。ニわの かさぎは、カラスを にらんで はねをぐんと ひろげたり 口ばしを ナイフのようにして ひなを まもります。	(かさぎ①) 羽を大きく広げ 口でカラスを追 い払う。
か①	カラスが ひなを ねらってる！ たたかわなきや	(かさぎ②) ひなを羽で囲ん で守る。
か②	いのちに かえても こどもたちを まもるわ。	
ひな②	くろい かげだ。	
ひな③	こわいよ。	
ひな④	たべられてしまうよ。	
か①	よかった、子どもたちが きてくれた。	
カラ②	あ 子どもたちが きた。どうする？	
子①	カラスが ひなを ねらってる	子どもたちも カラスを追いか う。
子②	あっちへ いけ かさぎを いじめるな。	

カラ①	ちきしょう。人がいるところは やりにくいなあ。	
カラ②	さんねん。	
か②	カラスが にげていくよ。	
ひな⑤	たすかった。	
か①②	みなさん ありがとうございます。	
ひな全	ありがとうございます。	
ナレ	⑦下田小学校の 子どもも 先生も 下田の ちいきの 人たちも、 かささぎを たいせつに みまもっていました。	
ナレ	⑧五がつ、五わのひなは、とぶ れんしゅうを はじめました。 はねを わさわさと うこかして、なんども なんども れんしゅう しました。	巣の外を見て 大きく体を動か す。
ひな①	おもいきり はねを うこかしてみよう。	
ひな②	おちそうで こわいな。	
ひな③	からだとはねの バランスが むずかしいな。	体全体での喜び
ひな③	かぜを つかまえ たぞ。	
ひな⑤	あつ、すこし からだが ういた。	
ひな全	やった、とべた！	
動作	(一年生みんなで、じぶんたちの すで はばたいてみる。)	巣立ちの喜びを 体験するように
子①	あつ、ひなが とんでいる。	
子②	がんばれ。	
子全	よかったね。	
ナレ	空へと とびあがった ひなが みたのは、下田小学校と 下田の けしきでした。	(下田上空の映 像。グーグルア ースと航空写 真。)
ひな①	いい けしきだ。	ひなが見た景色
ひな②	川の水が 光っている。	川と
ひな③	田んぼが ひろがっている。	田と
ひな③	子どもたちが いる。	人と。
ひな⑤	きもちが いいなあ。	
ひな全	うれしいな。	